

令和7年度 卒後アンケート（2023年度卒業生）結果報告

卒後1年を経過した卒業生に対して、本学部のディプロマ・ポリシーの活用度や本学教育に対する意見、職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を実施した。

1. 対象および方法

対象者：2023年度卒業生 97名

対象者は、COVID-19感染拡大の影響により、1～3学年次において遠隔授業および臨地実習の日数・内容の制限があった学年である。

調査期間：令和7年7月1日(火)～8月1日(金)正午（再通知：7月18日(金)）

方法：無記名 web 調査

卒業生の自宅へQRコード付きの依頼文を郵送し、Google フォームへの入力を依頼した。返礼として500円のAmazonギフト券の送付を行った。回収数が少なかった（19件）ため、愛知医科大学病院へ就職した卒業生（63名）に対し、院内のメールボックスへ依頼文を1回配布した。

2. KEY POINTS

- 卒業生のディプロマ・ポリシーの活用状況はほとんどの項目で80%を超えており、達成度は高かった。一方で、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」は、他の項目と比較して活用状況が低かった。
- 本学の教育に対し、愛知医科大学病院における充実した実習環境は非常に高く評価されている一方で、体系的な学習や技術演習が不足していると感じていた。
- 卒後1年で、「仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験」、「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」、「他の職員と関係を維持する経験」において質の高い経験をしていた。
- 26名（84%）の卒業生が仕事のやりがいを感じていると回答した。20名（64.5%）の卒業生が、今すぐには辞めないが現在の職場からの離職を考えていた。大学院の進学に興味がある卒業生は5名であった。

3. 結果

回収数は31名（昨年度33名）、回収率32.0%であった。

1) 対象者の基本属性

対象31名のうち、女性は30名（97%）、現在看護師として就業している対象は30名（97%）であり、31名全員が正規雇用であった。

2) ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の活用状況（項目1～9）（表1）

ディプロマ・ポリシー9項目の活用状況を「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で調査した。多くの項目で、「そう思う/少しそう思う」と回答した卒業生が80%を超えており、ディプロマ・ポリシーの達成度は高いと考えられた。一方で「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」に関しては、20～30%の卒業生が「あまりそう思わない」と回答しており、他の項目と比較して達成度がやや低い結果であった。すべての項目で「思わない」と回答した卒業生はいなかった。

表1 ディプロマポリシー活用状況

N=31				
	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	思わない
	名 (%)	名 (%)	名 (%)	名 (%)
1 看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる	12 (38.7)	17 (54.8)	2 (6.5)	0 (0.0)
2 看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている	10 (32.3)	19 (61.3)	2 (6.5)	0 (0.0)
3 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる	8 (25.8)	17 (54.8)	6 (19.4)	0 (0.0)
4 看護専門職者として倫理的に思考することができる	13 (41.9)	16 (51.6)	2 (6.5)	0 (0.0)
5 看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している	7 (22.6)	23 (74.2)	1 (3.2)	0 (0.0)
6 看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている	14 (45.2)	15 (48.4)	2 (6.5)	0 (0.0)
7 あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる	11 (35.5)	19 (61.3)	1 (3.2)	0 (0.0)
8 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている	7 (22.6)	14 (45.2)	10 (32.3)	0 (0.0)
9 看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる	10 (32.3)	21 (67.7)	0 (0.0)	0 (0.0)

3) 現在看護職として働く中で、本学の教育で満足・評価している点、不足している点について。また、本学での学びが、現在の自身の看護に取り組む姿勢・態度や現在自身に必要な能力・技術にどのような影響を及ぼしているか。(自由記載)

はじめに、満足している点では、愛知医科大学病院における充実した実習環境は非常に高く評価されていた。また、卒業前技術演習や試験が役に立ったとの意見もあった。次に、不足している点では、課題に迫られて体系的に看護を捉えることが難しかった点や、アセスメント能力、実践的な技術演習、高学年での演習機会の不足が挙げられた。最後に、本学での学びがどのような影響を及ぼしているかについては、患者の背景を考慮し、その人らしさを尊重する姿勢や、看護を振り返り根拠を考える習慣を身につけることに繋がり、現在の看護に取り組む態度や能力に良い影響を与えていることが示された。全人的な看護観を培うことができたという実感が卒業生に共通して見られた。

4) 職業経験の質について (表2)

卒業生の職業経験の質に関する得点は、119.0±16.7 点 (平均±SD) であった。なお、昨年度 108.7±21.4 点は、一昨年度は 109.9±20.2 点であり、ここ2年と比較して10点ほど上昇が見られた。

卒業生の職業経験の質に関する得点が高かった項目は、下位尺度Ⅱ「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」、下位尺度Ⅲ「他の職員と関係を維持する経験」であった。一方で、下位尺度Ⅴ「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験」の質得点が低かった。

表2 職業経験評価尺度-臨床看護師用-の結果

N=31				
	平均	標準偏差	最大	最小
I 仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験	20.1	4.1	25	10
II 看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験	21.3	2.6	25	16
III 他の職員と関係性を維持する経験	21.0	2.8	25	17
IV 看護職としての価値基準を確立する経験	19.2	3.0	25	11
V 発達課題の達成と職業の継続を両立する経験	18.0	4.4	25	9
VI 迷いながらも職業を継続する経験	19.5	3.3	25	13
合計	119.0	16.7	150	84

文献) 鈴木美和 (2004) : 看護職者の職業経験の質に関する研究 -測定用具「看護職者職業経験の質評価尺度」の開発-、看護教育学研究、13 (1)、37-50.

5) 現在の職場で必要とされている能力とそのために大学で学んでおくよかったこと（自由記載）。

必要とされる能力としては、コミュニケーション、主体性、自己研鑽力といった人間関係や向上心に関するものに加え、アセスメント能力、迅速な判断力、優先順位付けといった専門的な知識や実践的なスキル等が挙げられた。また、そのためにはアセスメント能力や臨機応変な対応力を養うこと、多くの事例に触れて主体的に学ぶ姿勢や、多様な人々と接することでコミュニケーション能力を高めておくこと等を大学で学んでおきたかったということが挙げられた。

6) 大学生活を振り返ったときに、社会人として役立っていること（表3）

大学生活を振り返ったときに社会人として役立っていることを、14項目について「役に立っている」から「役に立っていない」までの5段階で調査した。14項目中最も「役に立っている」と回答した卒業生の割合が多かった項目は「11. 大学での同級生との交流」20名（64.5%）であり、次いで「3. 大学での演習における学修内容」、「12. 大学での先輩との交流」14名（45.2%）、「4. 大学の実習で修得した看護実践能力」、13名（41.9%）であった。大学生活の中で得た人間関係や社会経験が、卒業後に役立っているという結果は昨年度より改善傾向であった。加えて、演習や実習での学びも良い影響を与えていることが伺えた。「役に立っていない」と回答した項目は、昨年度と比較して大きな変化はなく、大学生活の大部分で COVID-19 感染拡大の影響を受けた学年であり、大学行事や登校機会の減少が影響している可能性がある。

表3 大学生活のうち社会人として役立っていること

	N=33				
	役立っている	少し役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
	名 (%)	名 (%)	名 (%)	名 (%)	名 (%)
1 大学生生活全般	12 (38.7)	15 (48.4)	4 (12.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
2 大学での講義における学修内容	11 (35.5)	16 (51.6)	3 (9.7)	1 (3.2)	0 (0.0)
3 大学での演習における学修内容	14 (45.2)	13 (41.9)	4 (12.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
4 大学の实習で修得した看護実践能力	13 (41.9)	15 (48.4)	3 (9.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
5 大学での研究的思考の学び（教養ゼミ・卒業研究Ⅰ、Ⅱなど）	8 (25.8)	11 (35.5)	8 (25.8)	4 (12.9)	0 (0.0)
6 大学での看護実践能力修得のためのプログラム（看護総合・卒業前研修など）	12 (38.7)	15 (48.4)	4 (12.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
7 大学でのボランティア活動	3 (9.7)	7 (22.6)	17 (54.8)	4 (12.9)	0 (0.0)
8 大学からの短期留学	2 (6.5)	1 (3.2)	23 (74.2)	0 (0.0)	5 (16.1)
9 教員との交流	9 (29.0)	10 (32.3)	10 (32.3)	2 (6.5)	0 (0.0)
10 事務職員との交流	6 (19.4)	6 (19.4)	14 (45.2)	4 (12.9)	1 (3.2)
11 大学での同級生との交流	20 (64.5)	11 (35.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
12 大学での先輩との交流	14 (45.2)	8 (25.8)	7 (22.6)	1 (3.2)	1 (3.2)
13 大学の部活動やサークルでの交流	10 (32.3)	9 (29.0)	7 (22.6)	2 (6.5)	3 (9.7)
14 他大学の学生との交流	3 (9.7)	4 (12.9)	14 (45.2)	2 (6.5)	8 (25.8)

7) 現在の仕事のやりがいと満足度、離職、進学希望の有無

卒業生に対して、現在の仕事のやりがいを「大変感じている」から「全く感じていない」、仕事の満足度について「大変満足」から「全く満足していない」の各々4段階で調査した。80%以上の卒業生が仕事のやりがいについて、「大変感じている/感じている」と回答した。仕事の満足度については、「大変満足/満足」と回答した卒業生は74%（昨年度53%）であった。

一方で、「仕事をやめようと考えていますか」という問いに対して、離職する予定と回答した卒業生は2名（6.5%）であった。今後の予定について、看護師として正規雇用で別の病院・クリニックに勤務すると1名が回答し、1名は保健師として正規雇用で行政、企業などに勤務すると回答した。また、20名（64.5%）の卒業生が、離職を考えているが、今すぐは辞めないと回答した。卒業生らは仕事のやりがいを感じていながらも、将来的には現在の職場の離職を検討していた。また、大学院の進学に興味があると回答した卒業生は5名であった。

卒後本学に希望することについて複数回答で調査した結果、最も多かった回答は、「転職に関する情報提供」、であり、次いで「卒後教育プログラム」であった。

8) 愛知医科大学の卒業生で良かったこと・愛知医科大学の「伝統」を感じるもの(こと)(自由記載)

上記の設問に対しては、先輩後輩との繋がりや、卒業後も相談できる友人、教員との関係、充実した学習環境等であった。「伝統」を感じるものとしては、職場に先輩が多く働いていること等があった。

4. まとめ

本調査では、卒後1年が経過した卒業生に、現在の就業状況、ディプロマ・ポリシーの達成状況および職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を行った。卒業生らのディプロマ・ポリシーの達成度は、9項目中ほとんどの項目で達成状況について前向きな回答が多く、おおむね達成できているものと考えられた。また、職業経験については、昨年度より上昇がみられた。本学の教育で満足している点として、愛知医科大学病院での充実した実習環境、不足している点としては、課題に追われて体系的に看護を捉えることが難しかった点や、アセスメント能力、実践的な技術演習、高学年での演習機会の不足が挙げられた。対象となった卒業生は、1～3学年次にCOVID-19感染拡大のために遠隔授業・臨地実習時間の短縮等の制限を受けており、そのことが本調査の結果に影響を与えた可能性がある。

仕事に対しては約80%の卒業生が仕事へのやりがいを感じながらも、約70%の卒業生が将来的に離職を検討している。これは、職業経験の質の下位尺度V「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験」の質得点が低いことと一致しており、卒業生がプライベートと仕事を両立し、継続的にキャリアを築く経験の質が低いと考えられる。

なお、本年度の卒後アンケートは31名から回答があり回収率は32%であった。昨年度の35%と変化なく、依然として回収率が低い。今後は、同窓会の企画などを通じて案内するなど、調査依頼方法を工夫する必要がある。本調査の結果は学部教育にフィードバックし、対応を実践していく。

5. 見出された課題と今後の対応策

本調査で見いだされた課題として、以下の4点が考えられた。

1) 体系的な学習と実践的な技術演習の強化

卒業生は、課題に追われ体系的に看護を捉えることが困難であったと感じている。実践的な技術演習の機会を拡充し、学生が自律的に学習するとともに、臨床で応用可能な看護実践能力を修得できるよう、さらなる教育方略の検討が求められる。

2) アセスメント能力の育成

卒業生が不足していると感じる能力としてアセスメント能力が挙げられた。臨床現場で不可欠な臨床判断力の育成に向け、ユニフィケーション部門が企画するシームレスな教育の場の活用を促進する。

3) 実践的なコミュニケーション能力の育成

看護職に必要な能力として、多職種連携や患者・家族との円滑なコミュニケーションが挙げられる。実践的なコミュニケーション能力の育成に向け、多様な背景を持つ人々と接する機会としてIPEの授業や臨地実習を活用していく。

4) 卒業後の継続的支援に向けて

卒業後も継続的に学習やキャリア形成について相談できる支援が必要である。生涯学修支援部門が企画するキャリア支援教育の開催通知、大学院入試に関する情報提供を促進し、看護職として長く活躍できる支援を進める。

2025 年度 愛知医科大学卒業生の就職先に対する調査 集計結果報告

卒業生の就職先から本学卒業生のディプロマポリシーの到達度について第三者評価を得ることを目的に、令和 6 年度に本学看護学部卒業生が入職した愛知医科大学病院の病棟管理者(師長)および、外部施設の教育担当者に対し、本学卒業生(臨床 2 年目)の状況等について調査を実施した。

1. 対象および方法

1) 対象者

平成 29 年度カリキュラムを履修した卒業生のうち卒後 1 年が経過した者(令和 5 年度卒業生)を受け入れている愛知医科大学病院の病棟師長および、外部施設の教育担当者であった。

なお今年度の調査依頼は、本学卒業生が令和 6 年度に看護師・保健師として就職した施設とした(助産師課程の学校は除く)。

2) 調査期間

2025 年 7 月 1 日(火)～8 月 1 日(金)

3) 方法

Web アンケート

2. 調査内容

卒業生のディプロマポリシー(以下、DP)の到達度について、社会人基礎力の項目を用いて到達度、さらなる修得が望まれる能力、および、卒業生の動向について退職者の退職理由を調査した。なお、今回活用する社会人基礎力の項目は、本学の DP の内容が網羅されており、かつ臨床でも活用されている指標であることから理解が得られやすいと考え用いた。また、退職理由については、厚生労働省、日本看護協会の看護師の離職に関する調査結果から上位のものを抽出した。

3. 結果

愛知医科大学病院 25 部署(外来含む)ならびに外部施設 16 か所(内、保健センター等 2 か所含む)計 41 か所に配布し、回答のあった 31 件を有効回答とした(有効回答率 75.6%)。

1) 本学の卒業生(臨床 2 年目)の社会人基礎力の到達度の評価について

本学卒業生の社会人基礎力の到達度について、“そう思う”“少しそう思う”を合わせた割合で示す。最も到達度が高い項目は「1. 与えられた役割や業務について疑問があるときは質問し理解しようとしている：【物事に進んで取り組む力】」の 90.4%であった。その他、到達度の高い項目は「11. 所属施設・部署のルールを率先して守っている：【社会のルールや人との約束を守る力】」の 90.3%、「12. 自分の長所、短所を理解し調和を保つよう努力している：【ストレスの発生源に対応する力】」の 87.1%、「2. 業務遂行上困難なときその他のメンバーに協力を依頼している：【他人に働きかけ巻き込む力】」の 83.9%、「8. 患者・家族(対象者)の苦情や不平に対してその真意を理解しようとしている：【相手の意見を丁寧に聴く力】」の 83.9%であった。一方、到達度の低い項目は、「4. チームの目標にむけて自分のできることは何か考え発言している：【現状を分析し目的や課題を明らかにする力】」の 48.4%、「7. 結論と経過、自分の意見を区別して説明している：【自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】」が 54.8%、「6. 日常業務のひとつひ

とつにもっと良いやり方や効率的な方法はないかといった視点で取り組んでいる：【新しい価値を生み出す力】の 61.3%であった。

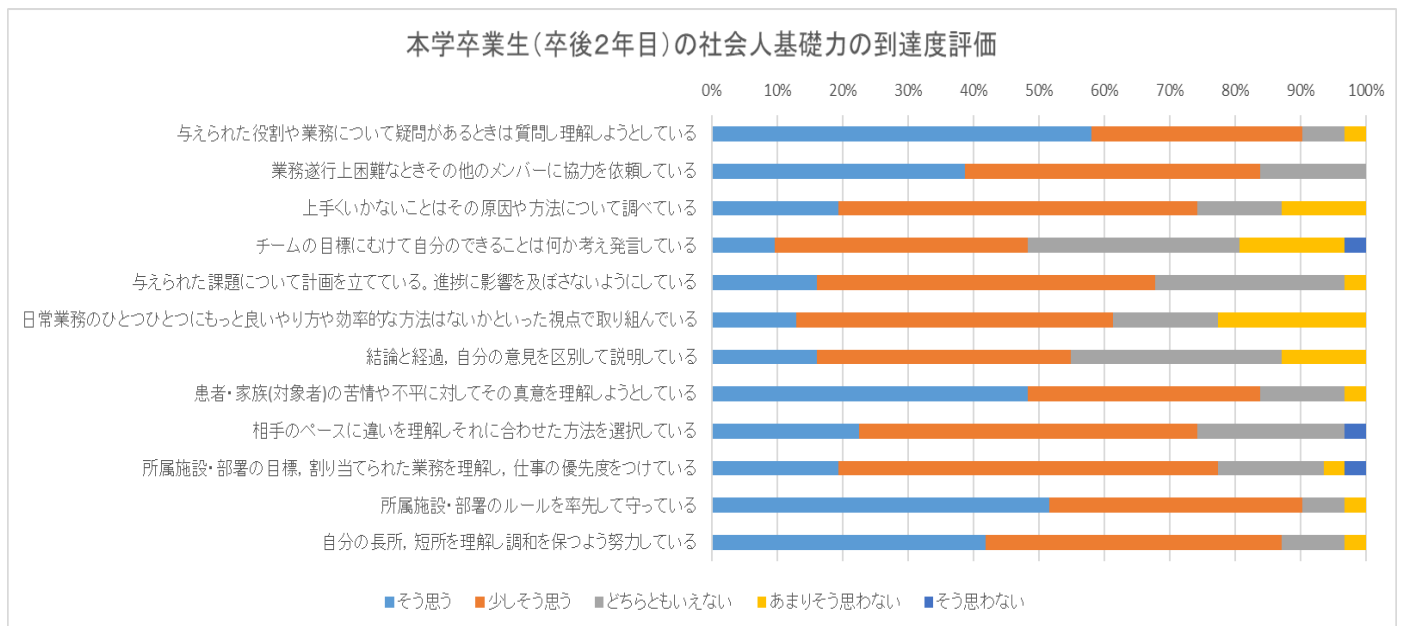


図 1 本学の卒業生(臨床2年目)の社会人基礎力の到達度の評価

2) 本学の卒業生(臨床2年目)において、さらに向上が望まれる能力について

さらに向上が望まれる能力について、最も回答の多かった能力は【4. 現状を分析し目的や課題を明らかにする力】であり、次いで【5. 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力】、【2. 他人に働きかけ巻き込む力】、【3. 目的を設定し確実に実行する力】、【7. 自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】であった。

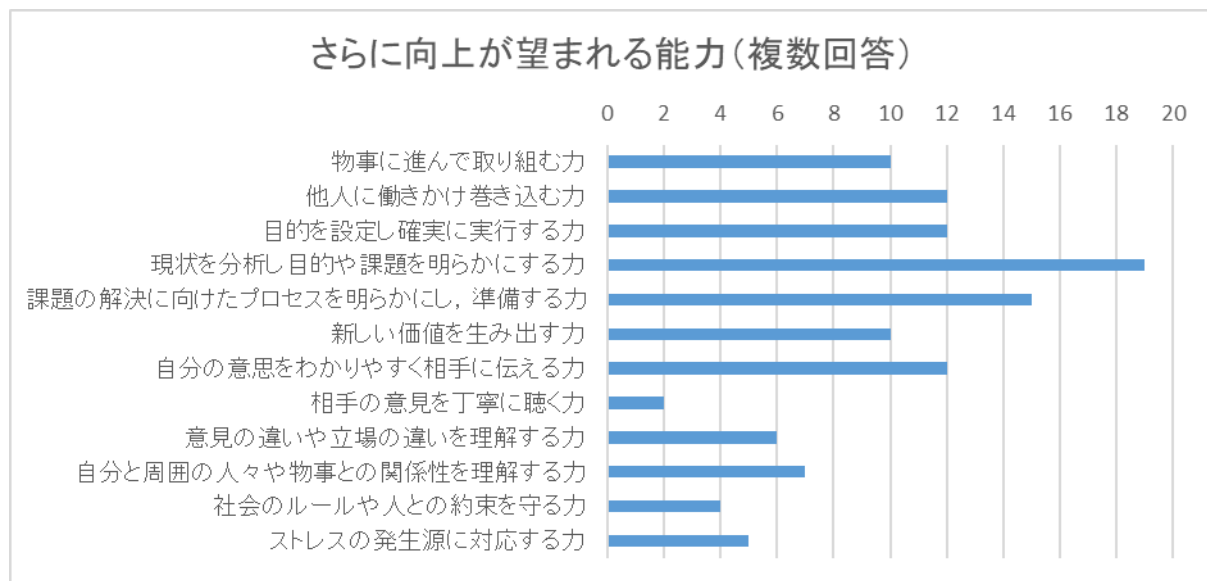


図 2 本学卒業生のさらに向上が望まれる能力

3) すでに退職した本学の卒業生(臨床2年目)がいる場合の退職に至った理由について

31 件中 25 件は“退職者はいない”と回答した。退職者のいた部署/施設において退職に至った理由は、

【他施設への興味】2件,【身体的/精神的な健康問題のため】1件,【責任の重圧/医療事故への不安】1件,【他施設への興味;責任の重圧/医療事故への不安】1件,【職場内での人間関係;勤務体制/夜勤への負担感;責任の重圧/医療事故への不安;身体的/精神的な健康問題】1件であった。

4) 本学の卒業生(臨床2年目)に対して気づいた点について(自由記載)

- ・分からないことがあれば、きちんと質問をすることができている。パートの職員に仕事を依頼する際も、自分で仕事内容を理解したうえで依頼することができている。
- ・明るく同期や先輩とコミュニケーションを図り取り組んでいる。積極性がやや弱いところもある。
- ・報告、連絡などできる。他のスタッフと協調性もある。自分の現在やりたい事に対してははっきりしており、つたえる力がある。
- ・チームの一員として相手を思いやり相手の立場にたち物事を考えることができおり、チームでの協働に対して貢献することができている。
- ・職務に非常に真面目に取り組んでいる。指導を受けた内容の吸収は早く、自己学習もできている。
- ・自ら考え行動する姿勢がある。社会人になり問題に対してもまずは自分で考えようとしている。
- ・物腰が柔らかく、コミュニケーション能力が高いと思う。
- ・患者、家族と真摯に向き合う姿がみられる。
- ・ポジティブ思考で、前向きである。
- ・円滑なコミュニケーションを図ることができる。勤務態度はまじめで誠実である。与えられた仕事は、しっかりできている。興味のあることは、自己研鑽を惜しまず努力できる。目標達成に向け学習も計画的に取り組める。組織の一員として報告の重要性や、ルールを守る大切さが理解できると良い。部署の繁忙期に自ら行動することができない。
- ・レポートが、本人からの提出が締め切りギリギリのため確認者が期日に間に合わせるために配慮することが必要なことがある。
- ・同期での協調性はある。リーダーシップを発揮する子がいらない。
- ・物事に対して不安が多く、何回も確認している傾向がある。

5) 本学に期待することや要望事項について(自由記載)

- ・物事や事象の変化に気づく力、気づきを発信、共有、解決する力をつけれるように取り組んで頂きたい。
- ・患者や家族、医療者間のコミュニケーションについて深めて欲しい。

4. まとめ

1) 本学卒業生(卒後2年目)のディプロマポリシーの到達度について

今回の調査結果から、本学の令和5年度卒業生(卒後2年目)は、昨年度の結果と比較して全体的に到達度が高い傾向にあった。具体的には、物事に進んで取り組むこと、社会のルールや人との約束を守ること、ストレスの発生源に対応すること、他人に働きかけ巻き込むこと、相手の意見を丁寧に聴くことができると評価された。また、コミュニケーション能力が高いという強みがあると評価された。一方で、与えられたことはできるが、現状を分析し目的や課題を明らかにすること、自分の意思をわかりやすく相手に伝えることは十分ではないという特徴が明らかになり、この傾向は昨年度と同様であった。

対象となった卒業生は、入学時に COVID-19 感染拡大があり、低学年では遠隔授業や実習制限が多かったものの、高学年では制限が緩やかとなり実習を行うことができていた。これは、到達度が昨年度に比べて高い要因の一つと考えられる。今回、到達度の低かった、現状を分析し目的や課題を明らかにすること、自分の意思をわかりやすく相手に伝えることは、本学 DP の「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」と大いに関連する。学修成果把握のためのアンケートにおいても本 DP の到達度は低い傾向にあり、本 DP の到達度を向上させることはこれまで同様に課題である。

31 件中 6 件ではすでに退職した者がおり、その理由は、他施設への興味、身体的/精神的な健康問題、責任の重圧/医療事故への不安、職場内での人間関係、勤務体制/夜勤への負担感であった。早期離職を防止するためにも、ストレスの発生源に対処できることが必要となる。

2) 今後の教育上の課題

本調査および卒後アンケートの結果をふまえ、以下の 3 点を今後の課題とする。

- (1) 科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができることを強化するために、4 年間継続して、各科目の講義や演習、実習のプログラム内容や演習方法等の工夫について検討を継続する。
- (2) 与えられたことだけでなく、現状を分析し目的や課題を明らかにすること、自分の意思をわかりやすく相手に伝える力を高められるようにするために、(1) の課題と合わせて各科目においてプレゼンテーションの機会などの教育方略を効果的に取り入れる。
- (3) ストレスマネジメントの修得を促進し、各自が自身に適した就職先を含めて主体的にキャリアを形成できるよう支援する。